あとがき

本書は、二〇〇七年三月、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科に提出した博士学位請求論文「一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国」に改訂を加えたものである。

本書では戦前、とくに一九三〇、四〇年代に、柳田国男を中心に形成された日本の民俗学が中国と如何なる関係を持ったかを明らかにし、それが日本の民俗学に如何なる意味を与えたかを考察している。日本民俗学史の角度から概略的にまとめれば、本書の主張は以下のようになるだろう。

日本が内地以外の多くの土地を所有しながら拡張しつつある帝国であった時代、「一国民俗学」として展開しようとした日本の民俗学は常に学問の守備範囲である「日本（＝内地）」と、政治・軍事の支配範囲としての「日本」とのずれという矛盾を抱え、外地をすべて喪失した戦後になって初めて文字通りの「一国民俗学」が定着したのである。中国は戦時中、日本民俗学のそうした矛盾を顕在化させる重要なきっかけであったと同時に、また矛盾を解決するための「比較民俗学」の試みが実践されようとする主要な場でもあった、と。

書くべきことは果たして本文のなかで書けたかどうか、それは読者の判断に待つほかないが、ここで本研究の経

緯や筆者の立場について補足的な説明を加えておきたい。

筆者は中国人である。中国の大学、大学院で日本語、日本文化を専攻し、やがて日本に留学して民俗学を専門とした。日本の民俗学については、一から勉強した。柳田国男の学問に感動し、その翻訳を試みたこともあるし、「郷土人」の「自省」を掲げる「一国民俗学」の論理に戸惑いを感じながら、日本の村落でフィールド調査を行っていた。

戦前の民俗学関係雑誌で日本の民俗学者による中国関係の記事に出会ったのは、たまたま民俗事象の古い姿やその研究史を調べようとするときであった。まもなく一九三〇、四〇年代の『民間伝承』や『旅と伝説』には数多くの中国関係の内容を有することを知ることとなり、衝撃を受けた。民俗学の概説書には中国がまったく登場せず、民俗学会の機関誌『日本民俗学』において中国を対象とする論考はほとんど見られないという状況に、当時の筆者はすでに慣れていたからである。

思いがけない中国との関連を目の前に、なぜ、どのように、いつからいつまでなど、知りたいことが山ほどあった。しかし民俗学の学史研究に当たった結果、中国との関わりが多かった戦時下に関する研究は多くなかったうえに、議論は戦争加担・植民地主義などの責任論に大きく束縛されていることを知った。中国に深く関わった事実さえほとんどふれられていないので、それでは自分で調べてみようと思うようになった。

戦時下、多くの民俗学者が様々な形で中国と関わっていたことは、決して秘密ではなかった。彼らの年譜や文章、自他による回想文に中国関係の記録が数多く見られる。すると、従来の学史研究がそれについてふれなかったのは、それらの事実について調べられなかったからではなく、最初から学史の内容として捉える意識が希薄だったからであろう。戦時下における中国関連の活動は研究成果を重視する立場から、個人的な事情、政治的な外力による「逸脱」だと判断されがちである。

しかし戦時下においては概念や理論、論文や著書だけを指標にするなら、民俗学は恐らく序章でふれた関敬吾の

場合のように、一九三〇年代前半と戦後との間の、もっぱら時局の影響による「停滞」として映ってしまうのであろう。中国との関わりを「逸脱」として見ず、それを媒介に当時の民俗学と当時の日本との関係を考えるのが本研究の出発点である。

日本民俗学と中国との関わりは、日本が中国に対して行った長期の戦争と支配という時代状況に大きく規定されていたが、学問をめぐる政治性を指摘するのは本書の目的ではない。本書で所々ふれているように、戦時下、日本の民俗学は中国への関わり方において、個人の場合でも、組織の場合でも、その認識や行動に明らかに限界をもっていた。その意味で主観的な意図を問わず、戦争加担や植民地主義の責任が問われてしかるべきである。かつて大きな被害を蒙った中国からきたという身分が、また筆者にそのように批判するための有利な立場を提供している。しかし、批判は直接的な手段ではあるが、最も有効な方法だとは限らない。尽きるところ、人間は反省を通してしか、真に責任を感じることも、責任を考えることもできないと筆者は思っている。責任論から自由になって初めて複雑な状況を客観的に捉えることができ、また反省のための確実な材料を提供できると信じている。

様々な限界があるが、戦時下において日本の民俗学が「一国」を越えようとする試みは、筆者は基本的に評価している。これは、本書の最後に提出した、「日本の民俗学は学問として日本以外の地域と関わる必要があるかどうか、必要であればどのように関わるべきか」という問いに対する筆者の考え方と関係する。

すなわち、民俗学は自国以外の地域と関わる必要がある。それは、異なる国家や民族の民俗事象間の相違点や共通点を並べ、民俗学の資料では証明できない起源や伝播、或いは自国・自民族の特質などを説明として付するものと異なり、自国での研究で培った手法をまったく新しい場で適用することによって、より一般性をめざす、民俗学の方法そのものを相対化する試みでなければならない。これが、筆者の理解である。

戦時下の「比較民俗学」には、このような方法を相対化する意図は含まれていなかった。しかし実際、「日本人」による「日本（＝内地）」の研究という閉鎖的な世界から一歩踏み出した途端、従来の民俗学の方法への反省が始まったのである。その試みは敗戦によって挫折し、戦後早々、すべて切り捨てられたことは残念である。反省されるべきなのは関わり方をめぐる政治性であり、関わりそのものを簡単に切ってしまうだけでは解決にはならない。戦時下の認識、行動を反省する機会と、民俗学の方法を相対化する可能性を同時に失うだけである。

執筆する間、同じ時代を生き、同じ状況にいたなら、学問、戦争、国家、民族、権力、自由などについて自分がいったいどのように考え、またどのように行動していたのかは、よく考えていた。それはまた図らずも、現在を生きる者として、今の状況において同じ問題をどのように考え、どのように行動すべきかを自問することとなった。執筆は終わったが、様々な場面でこれからもこの自問は続くだろうと思う。

いろいろな意味で本書は反省すべき点が多い。当時の民俗学者の格闘を追体験しようと思うが、まだ彼らの思想・認識の深いところまでふれえていない。戦後の日本民俗学については単なる展望に留まっており、その実態や三十年代からの展開との関連の解明が課題として残っている。そして全体を描き出すために内容の一部には状況証拠の累積による推測、推論が見られる。これから自分のさらなる研究や同じ関心を持つ方々の業績によって、間違いを訂正し、必要な場合、一部を新たに書きなおしていく覚悟を持っている。ご批判、ご指摘、ご意見をいただければ幸いである。

本書は筆者にとって初めての単著である。多くの方々のご指導とご助言をなくしては本書の研究は完成し得なかった。

博士課程の指導教官である福田アジオ先生と初めて出会ったのは一九九九年、北京は秋であった。当時ちょうど

半年間の赴任中にあった先生は筆者の修士論文の審査委員として口頭試問に加わり、懇切なコメントをくださった。その後日本に留学し、さらに機を得て先生のもとで本格的なご指導をいただけたことは幸せであった。現代民俗学の方法構築という問題意識、フィールド調査と文献資料を駆使する研究手法、そして徹底的な批判精神や謹厳なる学風など、先生から学んだ多くのことはこれから時間をかけてしっかり消化していきたい。先生の学恩に最大の謝意を表したい。

筑波大学時代から一方ならぬお世話になっている佐野賢治先生、そして蔡文高先生、岩田重則先生に厚く御礼を申し上げたい。博士論文の審査に際して諸先生から頂いた厳しいご批判と多くのご助言は、筆者にとって貴重な財産であった。

身辺の事情により途中で研究が挫けそうになりかけた時、孫安石先生と知り合ったのは幸運であった。時には日本で学位を取得した外国人研究者という大先輩として、時には中国近代史の専門家として、学問から生活にいたるまでのご指導とご配慮は、研究の大きな励ましとなった。

泉水英計先生のご紹介で最終年度に関わることができた「旧日本植民地研究とデータベースの構築」研究会はいつも良い刺激と楽しさが溢れていた。関連資料の紹介だけではなく、重要な示唆を与えてくださった中生勝美先生、鶴見太郎先生をはじめ、メンバーの皆様に深く感謝する。

大学院にいる六年間、様々な形でご指導いただいた歴史民俗資料学研究科、外国語学部中国語学科や常民文化研究所の諸先生、いつも楽しい雰囲気の中で議論することができた福田ゼミをはじめとする大学院生、比較民俗研究会、良友研究会の皆様、そして本書の研究で資料閲覧と利用の便を図ってくださった神奈川大学常民文化研究所、成城大学民俗学研究所、北京師範大学檔案館、直江千鶴子氏に謝意を記しておきたい。

在学中の二〇〇二、二〇〇三年度には文部省より国費奨学金の交付、そして本書の出版に際して神奈川大学21世紀ＣＯＥプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」より補助金の交付を受けた。同プログラムに、

二〇〇五年度よりＲＡ研究員（Research Assistant）、ＰＤ研究員（Post-Doctoral Fellow）として関わってきた。学位論文の作成、提出から本書の出版まで、ここでの環境と経験なくしては困難であった。関係する先生、職員の方々、そして研究員同僚の皆様に心より感謝する。

今回の論文選定および出版に際してご配慮とご指導を頂いた香月洋一郎先生と世織書房の伊藤晶宣氏、地図作成、校正などでご協力いただいたＨ・Ｓさん、土田拓さん、藤本真由海さんほかに厚く御礼を申し上げたい。

長年親代わりに見守ってくださった吉村亨先生と奥様、佐藤文明さん、そして留学中お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

最後にこの場を借りて、一人っ子でありながら近くにいて親孝行してこなかった筆者のわがままを許し、いつも支えてくれた両親に感謝したい。二人が揃って還暦を迎えた今年に、遅ばせながらの報告として本書を二人に捧げたいと思う。

二〇〇八年二月二七日

王　京